

2026.4  
(公社)富山県薬剤師会  
広報誌

# とみや 富薬

4号

第48巻  
No.441



ホザキイカリソウ *Epimedium sagittatum* Maxim.

(メギ科 *Berberidaceae*)

**生薬** インヨウカク（淫羊藿）5 - 6月頃、地上部の茎葉を刈り取り、陽乾する。

**成分** フラボノイド：icariin, epimedinA, C, des-O-methyl icariin、リグナン：icariresinol, olivil、アルカロイド：magnoflorine等。

**効能** 強壮・強精薬としてインポテンツ、神経衰弱、健忘症、慢性気管支炎、手足のしびれ、更年期の高血圧症、小児麻痺症の治療に煎服。薬用酒やドリンク剤に配合される。

元富山県薬事研究所  
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

## 〇〇表紙について〇〇



中国の浙江、湖北、安徽、甘肅、貴州、四川省などに分布する多年草で、日本に導入された時期ははっきりしません。『植物渡来考』(1929)には「漢種は宝暦(1751-1764)の『物類品隲』(1763)に見えず。天保(文政1817-1830?)の『本草図譜』(1828)にあれば其の間の舶来なるべし」としています。『物類品隲』には「叡山産葉厚く強にして光沢あり。冬に至って枯れず。蘇頌(1020-1101)曰く湖湘に出る者の葉小豆の如く、枝茎緊細。冬を経て凋ずと云うものはなり」と、主に山陰、北陸地方に分布する常緑のトキワイカリソウ(*E. sempervirens*)を記したと思われるが、京都ではめずらしい植物であったため蘇頌が云う中国を原産とする常緑のホザキイカリソウではないかと期待して記したものと思われる。

そして『本草図譜』の図は精巧で、葉の形態、花の咲き方などはまさにホザキイカリソウで、実物を見ないと描けない図です。讀も「淫羊藿 漢種なり。高さ一、二尺、三枝九葉となり、其の形秋海棠(*Begonia grandis*)に似て硬く、周りの軟刺ありて、光沢あり」とあり、ホザキイカリソウが宝暦年間から文政年間までの間に渡来したと考えて間違いがないようです。その間の『本草綱目啓蒙』(1803)に「花戸に唐種の淫羊藿と呼ぶものあり。葉和産より長大にして厚し。六葉の端に四出の小花数多く穂をなして直生す。穂に枝ありて菘藍(タイセイ *Isatis inctoria*)花形に似たり。初は紫色開く。寸は色浅し。イカリサウ(*E. grandiflorum* var. *thunbergianum*)の花形と大に異なり、花は集解に碎小独頭子と云う。……此の草江州(近江)に自生あり」とあり、花戸や近江で植栽されていたようです。後の『草木図説』(1852)の図も明らかにホザキイカリソウです。「淫羊藿 伝えて云う。漢種或云、江州に産す。草状、啓蒙に之詳しく。春、新茎を抜き梢に於いて二枝、或いは三枝に分かれ。枝と共に一梗を出し疎穂をなして花あり……エビメヂユム・アルピヌス(羅)」とも記され、『本草綱目啓蒙』を引用しています。

「インヨウカク」が日本薬局方に収載されたのは意外に遅く、『第十四改正日本薬局方第二追補』(2004)からでインヨウカクとして、ホザキイカリソウ以外に中国に自生する*E. pubescens*(長葉淫羊藿)、*E. brevicornu*(心葉淫羊藿)、*E. wushanense*(巫山淫羊藿)や、日本に自生するキバナイカリソウ(*E. koreanum*)、イカリソウ又はトキワイカリソウの7種の地上部と規定されています。

ホザキイカリソウは草丈30-60cm。根生葉は、1回3出複葉で2枚が花茎に対生します。小葉は卵形から卵状披針形、革質で長さ6-20cm、幅3-8cm、先端は尖り、基部は心形、葉縁部には刺毛があり、葉の上面は光沢があります。4-5月に10-30cmの円錐状花序を出し、径8mmの小さな花を20-60個咲かせます。花卉は萼片に比べ小さく囊状。蒴果は長さ約2cm。

中国の薬としての歴史は古く、『神農本草経』(200-300頃)に「淫羊藿 一名剛前、味は辛、寒。山谷に生ず。陰痿(インポテンツ)、絶傷(筋肉が障害される病気)、莖中痛を治す。利小便。益気力強志」と強壯剤などに使ったようです。陶弘景(456-536)は「人が之を服すれば好んで陰陽を為すものである。西川の北部に淫羊という動物があつて一日に百回交合する。それはこの藿を食うためだということだ。故に淫羊藿と名けたのである」と、これまた強壯剤を強調しています。

食用としても利用され、『救荒本草』(1406)に「嫩葉を採り、燥き熟し、水に浸して邪味を去り淘淨し油塩に調べて食す」と記され、現在でもまだ開ききっていない若い葉と花を食用にします。塩ひとつまみ入れ茹でてから、からし和えやキュウリ和えなどの和え物や、油炒めなどにします。また、生のまま衣をつけて天ぷらに、花は軽く熱湯にくぐらせる程度にして、二杯酢や三杯酢にします。(村上守一 記)